大学生活を自律的に成功させる学習に関する因子に着目した電子ポートフォリオの活用とその評価

Study for constructing e-portfolios assist students with their planning of university life

田中　佳子（Yoshiko TANAKA）
E-mail: khf04304@nifty.com

The first research examined freshmen's properties from eleven universities. Their deviation value varies from 80 to 34, but the result showed there was no significant difference among these university students' properties. A factor analysis identified three factors that the freshmen seem to share; the first factor is related to the students' emotional control, the second factor is their positive future perspective, and the third factor is their high self-esteem. We made an assessment sheet based on the three factors. We displayed the three factors to each of the students to help them realize how they view themselves. Finally, it seems that this study can contribute to constructing e-portfolios, which are designed to assist students with their planning of university life and future career.

大学生の学力低下問題が危惧されてから，学力に着目したさまざまな大学での授業改善[(1)]についての研究が進められている．大学での授業改善としては，教授法，授業分析，FD(Faculty Development)を目的とする研修で，学生をどのように指導すれば学力が伸長するかという論点が大きく展開されている．さらに授業をいかに学生にとってわかりやすく理解しやすいものにするかという点では，ICT(Information and Communications Technology)の進歩に伴い，e-ラーニングの活用，レスポンス・アナライザーの活用，授業形態の変容としてワークショップ型授業，PBL(Problem Based Learning)，などが取り入れられるようになってきた．大きな変化は大教室での講義から学生が主体的に動くという点に教育の力点が移動し，それらを統合した Active learning，また小田隆治による学生主体型授業の提案などがある．つまり，大学生の学力育成に対して教員が行う授業の改善という観点から学生が主体的に学ぶという観点に変化していっている．それでもなおかつ，これらの研究は学生をいかに主体的な学習者として成長させるかという，教員の側がどのように授業を変えていくかということが研究の目的となっている．

本研究は，これらとは異なり，学習者が自らを主体的に動く能動的な学習者としてどのように育てていくかを自覚的にするということを目的とした．中等教育機関で，高校生として受動的に教育を施されてきた新入生が，大学生となり，自律的な学習者として卒業していくことは高等教育機関の重要な役割である．そこで，大学入学時に個々の学生の基礎学力を測るだけではなく，学力以外の指標として学生自身が自分をどのように捉えているかというメタ認知能力に着目し，学習動機，学習方法を支える学習観[(2)]，精神的回復力[(3)]の質問紙を使用し, それぞれ 36 項目, 24 項目, 21 項目の計 81 項目の質問項目を, 分析し, 自律的学習に役立てことを企図した.

本研究を進めるにあたり，まず，学力に関わらない分析が適当であるかどうかを検討するために, 入学時の学力が異なる 11 大学理工系学部の新入生に対して上述した質問紙を用

いた調査を実施した．その結果は学力指標の 1 つである各大学の偏差値には大きな差があるにも関わらず新入生の学習者特性(学習観，学習動機，精神的回復力)には大きな差がないことが示された．次に 81 項目をバリマックス回転での因子分析を行い，三因子を抽出した．第一因子は学習者自身の情動に関わる因子であり，第二因子は学習者自身の未来像，姿勢，第三因子は対人関与に関わる自己評価の因子であった．これら因子を 11 大学の平均値を 0 として，8 タイプに分類した．学習者自身のタイプに応じたアドバイスを個票(Figure 1)に記載し，学生自身が自分をどう捉えてどう育てていくかの手がかりとするために一年次に本人に返却することを行っている．

今後は，二年次，三年次と学習者特性がどのように変化していくかを調査し，大学での成績優秀者，就職活動において実績がある学生の特性を分析し，大学生活を充実させるためのアドバイスができる e-ポートフォリオの活用を支える仕組みを開発していく．最終的には卒業年次に構造化インタビューを実施し成功した自律学習者がどのような時期にどのようなアドバイスを必要としていたかの質的調査も行いその評価，検証をする．

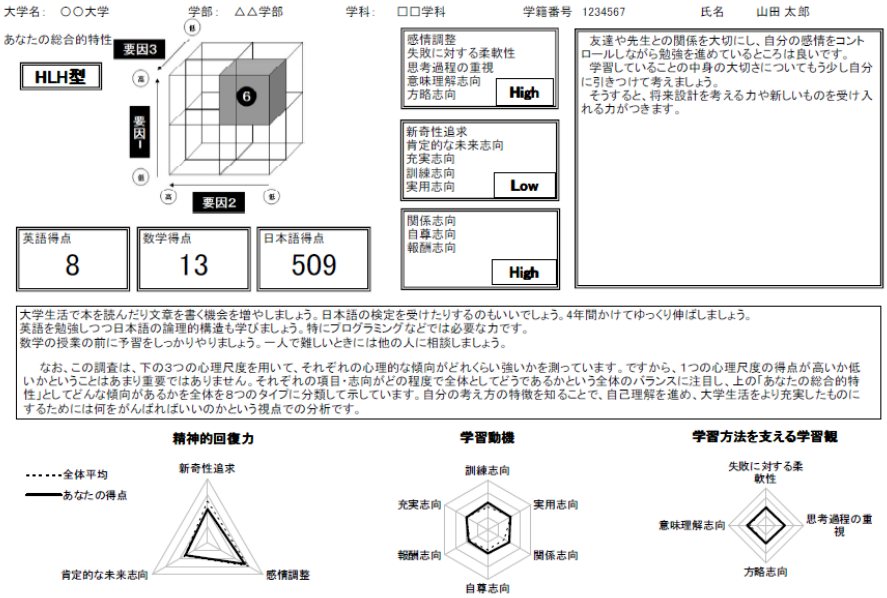

Fig.1　Personal Sheets (個票)

参考論文

1．赤堀侃司 ：“大学授業方法改善のための具体的技法” 日本教育学会大會研究発表要 56, pp24-27,1997

2．市川伸一,堀野緑,久保信子: “学習方法を支える学習観と学習動機” 『認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導』ブレーン出版,pp186-202，1998

3．小塩真司,中谷素之,金子一史,長峰伸治:“ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成” カウンセリング研究,35,pp57-65,2002